



第20号 (2014/5/14)

広島県福山市木之庄町4-3-1 4
Tel&fax: 084-917-5937
e-mail: info@crcc-fukuyama.org



Community Renaissance Research Center

ブックレットと紙芝居が出来ました!



2012年3月に本NPO主催で実施したシンポジウムをもとにしたブックレットが出来上がりました。付録として昨年7月に実施した「夢のみずうみ村」の視察報告も加えています。いずれも高齢者の「できる」と高齢者の「つながらる」をどう構築するかが課題として見えてきたように思いますので、これをサブタイトルとしました。

また、このブックレットは「一般財団法人義倉」からの助成金も使って作成しました。ありがとうございました。会員の皆様には1冊贈呈させていただきました。

す。いろいろご活用いただければ幸いです。また、本会会員の大庭さんが福山市立女子短期大学時代の学生さんたちと制作した紙芝居『被爆アオギリ物語 そばにいるよ』のよにがあるいていこう』の日・仏・英語版もできました。1セット千円です。こちらもご活用いただければ幸いです。

老いと死のつきあい方

名古屋市立大学教授 別所 良美さん

講師の別所先生は、本会の安川代表とともに「高齢者神話の打破」の中の1章を分担して書かれたので、3月1日に当NPOでお話しをしていただきました。

「専門が哲学なので、専門用語も出てきて少し難しいように感じましたが、なぜ私たちは老いることや死を迎えることを怖がるのか、と言うことから話が始まりました。そして「死と和解した生」を生きることが大切、というお話であつたと思います。私なりに理解したのは、その生き方とは人が(高齢者が)他人のために役立っていると言うことを感じながら、つながりながら生きていこうという本会の趣旨そのものではないか、と思いました。そして、最後のところでは、小物づくりに来られた方の、「私は小物は作らないけど、ここにるのが楽しいんだから」というセリフが浮かびました。以下

その日の概要です。

1. はじめに

若い頃興味を持たれていたのは、「近代理性は何だったのか?」ということであった。すなわち、文化の国ドイツがどうして野蛮なナチズムを生んだのか、近代理性の中の何が問題で野蛮を産んだのかということであった。

最近では、市場とは異なるコミュニティが必要ではないか。そのためには共同体とのかかわり方を考えなければならぬのではないか。

2. 「高齢者神話の打破」の中で言いたかったこと

(1) 客体(保護の対象)から主体へ

「老いの神話」は「若さの神話」「男らしさの神話」の裏返しである。「若者の男らしさの神話」は労働市場における競争という強迫観念でもある。将来楽をするために今頑張る、という「今生きていること」を否定するものでもある。

八代尚宏の『少子・高齢化の経済学』では、高度経済成長期には女性と高齢者を労働市場から排除することが合理的と考えられ、低成長の少子高齢化社会を迎えた今は女性と高齢者を労働市場に組み込み労働する「主体」として位置づけることが合理的と考えられている。「主体」になることは、大多数の低賃金非正規労働者に女性と老人を組み込むことなのであるか?どんな「主体」になるかが問題ではないか。

② 「死とともに生きる」とは？

「自然死」を恐れることは古代からあった。「生と死」が対立して考えられてきたことをオデッセ物語を例に取りながら説明。

ところが、アメリカのジャーナリストであるベティ・フリーダンは「自然死 錯綜状態 死」への恐怖から解放された「死と和解した生」への可能性をさぐるようになった。

それにかかわるのが競争原理で、「自己保存」のために生と死を管理しようとする強迫観念であり、近代の人間はこの考え方にとりつかれている。この「生と死の管理」を克服すると言ふことは「死ぬ権利」の獲得の問題でもある。これは臓器移植、中絶、安楽死などの問題をどう考えるか、と言ふことにつながる。

ベティ・フリーダンは「死と和解した生」のイメージをホスピスに重ね合わせて述べている。死を目前とした生も含めてあらゆる人生の時期の生が「あるがままの生」として意味を持つ。そしてこのような生の意味づけは「他者による承認」によって始めて可能になる。「誰かがかたわらにあり、ただその人のために付きそろう」「看取り」そのものが生に意味を与えている。

3. 具体的な展望

高齢者が死と生を取り戻し、死と向き合った生を生きる「主体」となるためには、「他者がかたわらに居ること」を必要とする。他者が「主体」の存在を認め、「主体」もまた他者の存在を認めるといふ相互承認を介して始めて「主体

は己の死という自然への恐怖を克服し、自然や死と和解した「主体」となる

「高齢者」の主体化は市場外の地域コミュニティの活性化によって可能になる。そのプロセスは「市場外空間における人間活動の促進」すなわち「もうからないかも知れない。しかしそこには人間とのつながりがある楽しい。そうであってもよいね、という空間」を作ること。必ずしも対価を要求せずに済ませるためには、自己の存在が絶対的に保証されているという安心感が必要である。

「労働」とは賃金をもらうためである、と考へるのは労働市場の考え方である。本来は他人のためになり、結びついていると感じることはないだろうか。

味噌づくりをしました



昨年数人で作った味噌が美味しかったので今年も皆さんに声をかけて、3月12日に味噌づくりをしました。地域の絆から5人の利用者さんが参加して下さい、総勢15人でした。

前日から煮ておいた大豆を潰して、味噌作りをする人、昨年の味噌を使って豚汁用の野菜を切る人、おにぎりを作る人、果物の皮をむく人と、それぞれが仕事を分担してワイワイと楽しいひとときを過ごしました。

この場は藤原さんのリードで進みました。そ

れぞれに仕事を振り分ける鮮やかさ。さすが社会福祉協議会で高齢者と関わってこられたことが生きていました。

地域の絆の方の中には、とてもカツラ向きがお上手な方や、むいた果物が口に入る方など。また、「味噌はよく作っていた」という方がいらつしやう、豆の潰れ方を見て、「これならいいヨ」と許可がおりました。職員の方も「はじめて味噌づくりをした」という方もありました。それぞれが作業に参加されたからか、ホームに帰られてからもしばらくは「楽しかった」と話されていたそうです。また高齢者の方々と一緒に味噌を作ったり料理を作ったりする中で、教科書的な「高齢者像」ではなく、生身の高齢者像を学べたように思います。



花見に行きました



味噌づくりに集まった人で福山城に花見に行きました。それぞれ料理等を持ち寄り、満開の桜の下で花を愛で、舌つづみを打ちました。とっても美味しそうですよ。

来年は皆様に声をかけます。



地域の絆 鯉まつり「仁」

出店しました



「こども」の日の5月5日に、地域の絆で「鯉まつり」が開催され、ルネッサンスからもいつものようにリサイクルバザーを出店しました。

あいにくの雨で室内での「鯉まつり」でした。狭いのでお互いの体が触れ合うようでしたが、それはそれで良かったように思いました。

また、昨年の「仁伍音楽祭」の時のように地域の絆の利用者さんと小物づくりをして「鯉まつり」で販売しました。1日目は18人、2日目は13人の参加があり、指導していただいた桑田さん、お手伝いしていただいた江藤さん、可世木さんも大変でした。人数も予想外に多く、しかも準備期間も短かったことから、前回に比べそれぞれが工夫出来るようにしたり、色々な作業が少なかったのが残念だったかなと思います。3日目は利用者さんと職員さんと一緒に販売用の看板づくりをしました。「わたしたちが作りました」の字を書くと、看板に貼り付ける折り紙の「こいづくりに」など、それぞれが出来ることを、出来るようにやりながら出来上がりました。今回は男性の方が3名来られ、「女性の集まりに初めて出てきたけど楽しいなあ」とおっしゃっていました。売り上げは今ひとつで、これからひと工夫が必要だろうな、と思います。



利用者が売子ちゃんをしています♪



利用者が協力して作った看板です

編集後記



先日、事務所の裏山の草むしりをしました。雑草の量に驚きましたが、色々な虫の赤ちゃんに出会えました。静かな山の中でも、春の準備が確実に進んでいたようです。とても小さなカタツムリ、バッタ、青虫など。あまり出会いたくないヤブ蚊やヤモリたちもいました(汗)。我が家の6才になる虫採り大好きな息子を連れてきたら、きつと大喜びすることでしょう。

きれいな花や若葉が目を楽しませてくれ、5月は一年でも一番よい季節ですね。新たな気持ちで物事に取り組むことが出来る時期でもあります。見易い紙面作りを心がけていきたいと思えます！(原田)

